

読みやすさと学術性の両立は可能か

——普及版ミュージル全集における『特性のない男』の編集をめぐる

桂 元嗣

はじめに

2016年から2021年にかけてユンク・ウント・ユンク社よりヴァルター・ファンタ編集による12巻本のミュージル全集 (Gesamtausgabe, 「ファンタ版」とする) が出版された。この全集は、長らくミュージル研究のスタンダードとして用いられていたローヴォルト社のアドルフ・フリゼー編集によるミュージル全集 (Gesammelte Werke, 「フリゼー(1978)版」とする) と比べると、いわゆる普及版として構成されている。ミュージルの全集としては、すでに2009年にヴァルター・ファンタ、クラウス・アマン、カール・コリーノ編集による「クラゲンフルト版」(Klagenfurter Ausgabe) がDVDで刊行されている¹が、ミュージルの遺稿を「遺漏なく公開」²したとされるこのデジタル版全集は、書籍という形式をとらずにハイパーリンクで草稿間の自由な移動を可能にし、1万ページを超えるとされる草稿を一つのフォーマットにまとめることができた一方で、とりわけ未完に終わった『特性のない男』に関しては、草稿に付せられているミュージル特有の略記号による分類についての専門的な知識が前提とされるなど、出版当初から「読めない」³との批判があった。ところで『特性のない男』が「読めない」という批判自体は、すでにフリゼー(1978)版の段階においても存在していた。小説の生成過程に関する研究がまだ不十分⁴で、草稿が書かれた年代も暫定的にしか定められていない状態のまま草稿が並び置かれ、さらに膨大な草稿を書籍に収めるために最初期の草稿を小さなフォントで掲載したフリゼーの編集方法は、『特性のない男』に「誰も最後まで読み通すことのできない」⁵小説という評価を定着させることになった一因であることは否定できない。

いずれにしても上記の例は、編集がきっかけとなって生じたミュージル作品に対する「読めない」という批判である。ファンタはこうした『特性のない男』の編集をめぐる数々の批判をふまえ、遺稿のデジタル化や小説の生成過程に関する長年の研究の成果⁶をも

1 その後2015年と2019年にアップデートが行われている。

2 *Beiheft*. In: Robert Musil: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte digitale Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Herausgegeben von Walter Fanta, Klaus Amann, Karl Corino. Klagenfurt (Robert Musil-Institut der Universität Klagenfurt) 2009, S. 8.

3 Vgl. Bernhard Metz: Bücher, nicht Texte: Warum wir Musil in der Klagenfurter Ausgabe nicht lesen können. In: Massimo Salgaro (Hrsg.): *Robert Musil in der Klagenfurter Ausgabe. Bedingungen und Möglichkeiten einer digitalen Edition*. (Musil-Studien Band 42) München (Wilhelm Fink) 2014, S. 197-218.

4 Regina Schaunig: „Das Unfertige und das Ungeratene“. Musils Vorstufen zum Mann ohne Eigenschaften in digitaler Edition. In: *editio* 23. 2009, S. 109-146, hier: S. 112.

5 Walter Fanta: Robert Musil – Klagenfurter Ausgabe. Eine historisch-kritische Edition auf DVD. In: *editio* 24. 2010, S. 120.

6 Vgl. Walter Fanta: *Die Entstehungsgeschichte des „Mann ohne Eigenschaften“ von Robert Musil*. Wien u. a. (Böhlau)

とに普及版全集を新たに編集し、さらに「ミュージル・オンライン・トータル」と称してファンタ版全集を用いながらオンラインで草稿を確認し、普及版全集の不足を補うことができるような計画⁷を構想している。とはいえ、2016年から運用の始まった『ミュージル・オンライン (<http://musilonline.at>)』は、2024年時点においてもなおファンタ版全集のうち『特性のない男』関連の第1～6巻分のテキストだけがオンラインで読め、遺稿の一部が写真で確認できる程度であり、完成までにはまだまだ時間がかかりそうな様相である。⁸ またファンタ版全集自体も、当初はクラゲンフルト版のレーゼテキストと同じく全20巻で刊行予定だった⁹のが、刊行時には日記と手紙を含めた全12巻へと変更され、さらに刊行中に大幅な構成の変更が行われた結果、最終的には日記と手紙を除いた全12巻となっている。¹⁰

こうしたオンライン版の難航やファンタ版全集の構成変更の背景には、『特性のない男』の草稿を学術的な裏付けをもって整理しつつ普及版を編集する難しさが見て取れるのだが、難解で知られるミュージルのテキストを、読みやすさを考慮して編集することはそもそも可能だろうか。たとえばトーマス・マンは、『特性のない男』を「もっとも重要な意味でアクチュアルな本」¹¹と評し、「人々が慣れているような、しかるべき陰謀があったり、ハンスがグレーテをどうやって手に入れるのか、そもそも手に入れるのか、とはらはらしたりできるような、連続した筋をもった」¹²小説とは異なる、「もはや小説ではない」¹³本とみなしている。ミュージル文学が「読めない」という場合には、編集上の問題と並んで、マンが言及するようなミュージル文学特有の難解さや文学的方法に根差した読みにくさも同時に考慮に入れる必要があるように思われるが、ファンタの「読みやすい」編集は、こうした側面をどのくらい踏まえているのだろうか。

本稿は、ファンタ版全集の第1巻から第6巻までを構成する『特性のない男』のうち、第4巻と第5巻の「続き (Fortsetzung)」、すなわち1932年末に部分刊行された『特性のな

2000.

⁷ Walter Fanta: Musil online total. In: Jens Klingner/Merve Lühr (Hrsg.): *Forschungsdesign 4.0. Datengenerierung und Wissenstransfer in interdisziplinärer Perspektive*. Dresden (Institut für Sächsische Geschichte und Volkskunde) 2019. S. 149-179. なお、書籍版とデジタル版のハイブリットという構想自体は、クラゲンフルト版が出版された2009年の時点ですでに表明されている。Beiheft, S. 41.

⁸ 2022年以降、『ミュージル・オンライン』はオーストリア国立図書館とクラゲンフルトのアルペン＝アドリア大学・ローベルト・ミュージル研究所の共同プロジェクトとなり、新たにサイトを立ち上げた (<https://edition.onb.ac.at/context:musil>) が、ファンタ版の『特性のない男』のテキストが読める旧サイト (<http://musilonline.at>) は引き続き利用できる。(2024年12月26日閲覧)

⁹ Beiheft, S. 41.

¹⁰ 2019年に刊行されたファンタ版ミュージル全集の第7巻の末尾に、全集の構成の変更があったこと、日記と手紙は全12巻とは別に刊行されるとの予告がある。Walter Fanta: Nachwort des Herausgebers. In: Robert Musil: *Gesamtausgabe*. Band 7 (Bücher I). Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg/Wien (Jung und Jung) 2019, S. 499.

¹¹ Thomas Mann: Robert Musil „Der Mann ohne Eigenschaften“. Antwort auf die Rundfrage: „Die besten Bücher des Jahres“. Erstmals in *Das Tagebuch*, Berlin, 13. Jg., H. 49, 1932. In: Ders.: *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. Band XI (Reden und Aufsätze 3). Frankfurt am Main (S. Fischer) 1960, S. 782-785, hier: S. 784.

¹² Ebd., S. 783.

¹³ Ebd., S. 784.

い男』第二巻（第1章～第38章）の継続部分の草稿と、第6巻の「前段階 (Vorstufe)」、すなわち『特性のない男』として形を成す以前に「スパイ」や「双子の妹」などのタイトルで構想された1910～1920年代の草稿がそれぞれどのような原則のもとに編集されているかについて、クラゲンフルト版と比較しつつ紹介する。そのうえで、読みやすさを優先して編集することでムージル文学の作品構成原理との齟齬を生じさせつつも学術性との両立をはかろうとするファンタの試みが目指すところについて考察する。

1. 「続き」の編集について

1-1 2つの編集原則

ムージルは1930年に『特性のない男』第一巻（第1部、第2部）、1932年末に第二巻の一部（第3部：第1章～第38章）を部分刊行したのち、1938年にゲラ刷りにまで至った続編の20章（第39章～第58章）を自ら回収し、加筆修正に取り組みはじめる。その後同年3月にオーストリアがナチス＝ドイツに合邦されたことがきっかけで出版人のゴットフリート・ベルマン＝フィッシャーが国外に逃れると、ムージル自身も8月に妻マルタとともに大量の『特性のない男』の草稿が収められた紙挟み(Mappe)とノート(Heft)を抱えてスイス・チューリヒへと亡命を余儀なくされる。その後、翌39年からはジュネーヴに拠点を移し、死を迎える42年まで小説を完成させるべく草稿の書き換えに従事する。その結果、ゲラ刷りにまで至った20章は幾重にも枝分かれしていくことになる。

クラゲンフルト版では、部分刊行された『特性のない男』第二巻第1章～第38章の「続き」として、草稿を①「続き系列(Fortsetzungsreihen)」、すなわち第二巻の部分刊行直後の1932年から1936年にかけて執筆された章群と、新たなモチーフの展開や小説の結末についての構想が収められたグループ、②「中間の続き(Zwischenfortsetzung)」、すなわちその後1937年にゲラ刷りにまで至った20の章と、それにさらに継続する形で1939年まで書き続けられた5つの章が収められたグループ、③「ジュネーヴでの書き換え系列(Genfer Ersetzungsreihen)」、すなわち1939年から1942年の作者の死までジュネーヴで手を加えられ、ゲラ刷りにまで至った20章の第47章を起点にさらに枝分かれしてゆく三系列の章群が収められたグループ、の3つのカテゴリーに分け、それぞれ「レーゼテキスト(Lesetext)」、「転写(Transkription)」、「写真(Faksimile)」がハイパーリンクで接続された形で収められている。

ファンタ版『特性のない男』は、クラゲンフルト版を普及版向けに編集し直したものと見えるが、ファンタは編集にあたり二つの原則にもとづいて「続き」を第4巻と第5巻に収録している。ひとつ目の原則は「最終版の原則」(Prinzip der letzten Hand)、すなわち「作品の最終稿だけが読者の目に届くべきだ」¹⁴という原則である。この原則にもとづき、例えばゲラ刷り原稿にムージルが手を加えている場合は、手書きの修正箇所を書籍版のテキストに反映させ、修正前の表現についてはデジタル版でのみ確認できる

¹⁴ Walter Fanta: Nachwort des Herausgebers. In: Robert Musil: *Gesamtausgabe*. Band.1 (*Der Mann ohne Eigenschaften*). Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2016, S. 524.

ようになっている。こうした原則は複数の似たような草稿群の採用基準にも反映されており、たとえばクラゲンフルト版における③「ジュネーヴでの書き換え系列」のうち、「最初の書き換え系列」にカテゴライズされた章群（第47章～第50章）は、ファンタ版ではすべて省略されている。また、一般的に「天才の章」と呼ばれる章群を含む「第二の書き換え系列」と最晩年の「第三の書き換え系列」は、作中で取り上げられているテーマに違いがあるためどちらも掲載されているが、双方に共通して執筆が行われた「夏の日の息吹」とタイトルのついた章の草稿については、「第二の書き換え系列」のヴァージョンはファンタ版では採用されず、絶筆となった「第三の書き換え系列」のヴァージョンのみが採用されている。¹⁵ファンタによれば、普及版全集における『特性のない男』では、「素材を並べ広げるよりは創作過程の最終結果を演出」することで、「文献学的な詮索に煩わされることなく、間違いなく世界的な文学のひとつに数え入れられるであろう作品を楽しんで読む」¹⁶ことが優先されているのだが、以上のような選択から、ゲラ刷りの第39章から第46章、その後枝分かれしてジュネーヴで死の直前まで書かれた「第三の書き換え系列」の第47章から第52章へと向かう『特性のない男』の物語の流れを「最終版」として明示しようとするファンタの編集方針が透けて見える。

もうひとつファンタが重視している編集上の原則として、「作者による権威づけの原則 (Prinzip der Autorisierung durch den Autor)」¹⁷がある。すなわち作品の「公開の度合い (Grad der Publiziertheit)」¹⁸がファンタのいうところの「作者の最終的な意図」¹⁹に近づくための権威づけとなりうる、という考え方である。この原則にもとづき、ファンタ版の第4巻には公開の直前まで至った②「中間の続き」にあたるゲラ刷りの20章がまず優先して置かれ、そのゲラ刷りに継続する形で書き進められた5つの章（第59章～第64章）、さらに③「ジュネーヴでの書き換え系列」が、執筆過程を時系列順に追えるような配列で並べられている。その一方で、1932年から36年にかけて書かれた①「続き系列」の草稿は、ゲラ刷りにまで至った20章と比べると作者ムージュルの最終的な意図からは遠い「異なる美的原則にもとづいて書かれた」²⁰ものとして、第5巻に回されている。その結果、巻数が進むにつれて時系列的にはさかのぼった初期の草稿が掲載されるのに対し、その内部においては時系列を追って草稿が配列されるという、ちぐはぐな構成となっている。²¹

15 ただしゲラ刷りの20章に継続する形で書き進められた5つの章にある第61章「夏の日の息吹」については掲載されている。この点においても以下で論じる「最終版の原則」と「作者による権威づけの原則」をともに満たそうとする際の矛盾として挙げることができる。

16 Ebd. S. 522.

17 Ebd.

18 Ebd.

19 Ebd.

20 Ebd., S. 523.

21 1978年刊行のフリゼー版『特性のない男』では、ゲラ刷りまで至った20章のうち、③「ジュネーヴでの書き換え系列」の「第三の書き換え系列」がまず置かれ、その後「第二の書き換え系列」から「前段階」の草稿である「スパイ」構想まで一貫して時系列をさかのぼるように草稿が配列されている。Vgl. Adolf Frisé: Anmerkungen zum MoE-Nachlaßteil. In: Robert Musil: *Gesammelte Werke*. Band 1 (*Der Mann ohne Eigenschaften*). Herausgegeben von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978, S. 2050.

1-2 ファンタ版の矛盾とムージルの執筆方法

ファンタは、かつてフリゼーが1952年に刊行した『特性のない男』において生じた混乱、すなわち成立年度の異なる遺稿を自らが想定する小説の展開や結末をもとに主人公の名前を改変するなど恣意的に編集したことで生じた混乱を回避するために、上に挙げた二つの明確な原則を打ち立て、それを遵守しようとしているのだが、原則にとらわれるあまり、結果として時系列的には「最終版の原則」に当てはまるはずの草稿を外すという矛盾にも陥っている。その代表的な例が、拙論²²でも言及した「仔馬と騎手」という短い草稿で、③「ジュネーヴでの書き換え系列」のうち、ファンタ版全集では省略されている「最初の書き換え系列」に収められていた草稿である。この草稿では主人公ウルリヒと妹アガータが、隣人愛に代表される愛の「不気味なほど美しい原因のなさ」(GWI, S. 1251)²³や、愛するという感情が人を盲目にするといった問いにまつわるテーマを中心に語り合う場面が描かれるが、内容的には明らかに②「中間の続き」におけるゲラ刷りの20章のうちの第48章「愛は盲目にする、あるいは探索されない重要な問題」を反復している。「仔馬と騎手」の草稿は、タイトルにある「仔馬」ないし「騎手」の話題が一切出てこないという点や、ひどく省略の多い書き方から、ムージルが執筆に着手しつつも中断したものと判断できる。しかし、「最終版の原則」にもとづけば、こちらの方が時系列的にはファンタのいう「作者の最終的な意図」に近いはずである。だが、「権威づけの原則」にもとづいて考えると、むしろ公開の度合いの高いゲラ刷りまで至った章が優先されてもおかしくない。いずれにせよ原則にもとづいては判断できない矛盾のなかで、編集者であるファンタが読みやすい小説を読者に提供することを優先させたために草稿が削除された一例といえる。

ファンタが矛盾に陥る要因、それはムージルの執筆方法が本質的にファンタの言及する「作者の最終的な意図」やその権威づけを打ち消す方向へと向かっているためである。それは結局のところ、物事にはつねに別の側面があるはずだという、ムージルの「可能性感覚(Möglichkeitssinn)」(GA1, 16)に根差している。『特性のない男』第一巻が刊行へと至ったように、第二巻の「続き」もまた結末へ向かって書かれている、それはそうなのだが、それとともにムージル研究の初期から指摘されているように、ムージルには公開の度合いの高い草稿であっても別の可能性をふまえて推敲し直し、一つのモチーフを新たな問題に結び付け、さらに展開させようとする生理にも似た欲求がある。²⁴それで

22 桂元嗣「『構成的イロニー』再考——新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって」、『武蔵大学人文学会雑誌』第52巻3・4号、2021年、1-18頁。

23 ムージル作品からの引用は、原則としてファンタ編集の普及版全集(Gesamtausgabe)を用いる。クラゲンフルト版を引用する場合は2019年のアップデート版を用い、転写のファイル番号を記入する。引用に際して文献は次のように略し、巻数・頁数とともに文中に示す。

GA: Robert Musil: *Gesamtausgabe*. Bd.1-6. Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2016-2018.

KA: Robert Musil: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Update 2019. Herausgegeben von Walter Fanta am Robert Musil-Institut / Kärntner Literaturarchiv der Alpen-Adria Universität. Klagenfurt 2019.

24 Wilhelm Bausinger: *Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman „Der Mann ohne Eigenschaften“*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1964, S. 7.

いながらムージルはただひとつの計画にしたがって作業を進めることはなく、さらなる計画が立てられても初期のイデーや古い計画が最終的にしりぞけられることはなかった。²⁵ その最たる例が、ムージルがジュネーブで死を迎える3か月前、すなわち絶筆となった「夏の日の息吹」を数か月にわたって推敲しているさなかの1942年1月半ばに書かれた「ウルリヒの後書き、結語 (Ulrichs Nachwort, Schlußwort)」という、いささか唐突なメモである。「第二次大戦を体験して年を重ねた今日のウルリヒ、そしてこの経験をもとに彼の物語を、そして私の本を締めくくる」²⁶と記述されたこの草稿には、主人公による後書きないし結語が「一種の終わり」の代わりに、あるいはその後(に) (GA5, 405)置かれるとメモされている。ムージルは、少なくとも卒中の発作に襲われた1936年5月の段階まで、『特性のない男』を第一部「一種の序文」ではじめて第四部「一種の終わり」で締めくくるという均整の取れた構成を念頭に置いていた。²⁷しかし「一種の終わり」についてはその後構想が具体化することなく、卒中後のムージルはむしろゲラ刷りにまで至った20章の書き換え作業に力を注いでいく。「ウルリヒの後書き、結語」の存在は、1936年までの「一種の終わり」計画が死の直前までしりぞけられることなく継続していたことを示すものであるが、同時にムージルはこのメモにおいて、死の直前まで構想していた歴史・哲学的なエッセイ集ないしはアフォーリズム集を新たに『特性のない男』に組み込むことで、第一次世界大戦前夜を舞台とする『特性のない男』第一巻の歴史・哲学的考察を時局の変化に合わせて「清算 (Liquidierung)」 (GA5, 405)する案についても記している。個別の歴史的な事象の背景に「出来事の幽霊的なもの」 (GA11, 84)、「精神的に典型的なもの」 (ebd.)を見て取ろうとするムージルの姿勢や、草稿を幾重にも枝分かれさせてきた作家のこれまでの執筆方法を考え合わせれば、いかにもムージルが考えそうな案ではあるが、従来の研究ではこのメモは決定ではなくあくまで単なる「思いつき」²⁸として、十分に検討されてこなかった。²⁹クラージェンフルト版もまた、このメモに「NR36」という略記号が付され、1936年の結末部分についての構想が収められた「清書のためのメモ (Notizen zur Reinschrift)」のファイルに収められていたことを根拠に、例外的に1932年から36年にかけての①「続き系列」のグループにこのメモを収めることで解決している。普及版であるファンタ版全集でもクラージェンフルト版をそのまま踏襲して「異なる美的原則にもとづいて書かれた」草稿がまとめられた第5巻に収めている。しかし、ファンタ自身が言及しているように、「ウルリヒの後書き、結語」で言及される第二次世界大戦時の世界政治的な状況や新たな文化的段階、とりわけ「黄色人種対白

²⁵ Francesca Pennisi: *Auf der Suche nach Ordnung. Die Entstehungsgeschichte des Ordnungsgedankens bei Robert Musil von den ersten Romanentwürfen bis zum ersten Band von „Der Mann ohne Eigenschaften“*. St. Ingbert (Werner J. Röhrig Verlag) 1990, S. 22.

²⁶ Walter Fanta: Nachwort des Herausgebers. In: Robert Musil: *Gesamtausgabe*. Band 5 (*Der Mann ohne Eigenschaften*). Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2018, S. 405.

²⁷ Ebd., S. 445.

²⁸ Karl Corino: *Robert Musil. Eine Biographie*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2003, S. 1422.

²⁹ ファンタ版をふまえて『特性のない男』の結末部分と「ウルリヒの後書き、結語」に触れた論考としては以下のものがある。Richard Kämmerlings: Die Enden der Parabel. Wie geht „Der Mann ohne Eigenschaften“ aus? Die neue Musil-Werkausgabe ermöglicht überraschende Entdeckungen zu einem Jahrhundert Roman. In: *Die Welt*. 18. Juli 2020, S. 28.

色人種という大きな問題」(GA5, 404)についての考察は、あきらかに死の直前まで推敲がなされていた「夏の日息吹」の草稿にも影響を及ぼしている。³⁰この草稿では、同タイトルの別バージョンと同様、花吹雪が葬列のように音もなく舞う夏の庭で「千年王国」と呼ばれる恍惚状態に陥り、いつしか覚めた兄妹が、二つの異なる精神状態や生き方について会話を交わす場面が描かれている。興味深いことに、この草稿ではこれまでのバージョンでは言及されなかったような「西方的、西洋的、ファウスト的な」(GA4, 435)人間のあり方と、「アジア的」(ebd.)すなわち「東方的、非ファウスト的」(GA4, 437)な人間のあり方とが比較されており、最終的に「〈ひとりの人間が示しうるあらゆる特性のある〉男」(ebd.)と「〈特性のない〉男」(ebd.)との対比としてまとめられている。すでに別稿³¹で論じたように、「夏の日息吹」とそれに関連する草稿について年代をさかのぼりつつ確認すると、恍惚状態から覚めた兄妹はともに庭と外の世界とを分ける鉄格子のそばまで行き、格子の向こう側の世界を眺める場面が続いている。「夏の日息吹」で描かれる現実世界から切り離された庭で展開する兄妹の愛の恍惚状態は、草稿の段階においては常にそれ以外の人々の状態、ときには①「続き系列」に収められた初期の構想のように、娼婦殺しのモースブルッカーという登場人物を彷彿とさせる、つまり次章で取り上げる1910～1920年代の構想に連なる怪物じみた男³²と対比され、ときには②「中間の続き」に収められた草稿のように、鉄格子の向こうを通り過ぎてゆく、ナチス時代の群衆を想起させる同時代の人々³³と対比されながら、イロニーをはらみつつ考察されてきた。絶筆となった1942年の草稿は、兄妹が庭の鉄格子にまで移動する場面に至ることなく途切れている。しかし時局の変化とともにイデーの焦点をずらしながら書き換えられていく数々の草稿の存在は、時間が静止したように歴史的世界から切り離された庭を舞台に兄妹の会話ばかりで構成されているように見える最晩年のテキストのその先に、あるいはファンタが「作者の最終的な意図」を演出した物語の流れに平行して、現実世界に対応させつつミュージルが小説を展開させる可能性が存在していたことを浮き彫りにするのである。絶筆となった「夏の日息吹」において唐突に描かれることになった「西洋的、ファウスト的な」人間のあり方と、「東方的、非ファウスト的」な人間のあり方との比較が、その後書かれたかもしれないイデーの展開の一端である可能性は、同時期に書かれた「ウルリヒの後書き、結語」とともに読むことによってはじめて明確になる。しかし普及版においてはこうしたミュージルの執筆方法やイデーの展開を追いつつ読む可能性はすべてデジタル版にゆだねられ、あくまでファンタの編集原則のもとで「作者の最終的な意図」であるかのように演出された草稿を「楽しんで読む」ことができるように提示することが優先されているのである。

30 Fanta: Nachwort des Herausgebers. In: Musil: *Gesamtausgabe*. Band 5, S. 447.

31 桂元嗣「格子の向こうの群衆——時局に対するミュージルの取り組みと『特性のない男』の「庭の章」、『オーストリア文学』第24号、日本オーストリア文学会、2008年、10-18頁。

32 ①「続き系列」のうち、「新たな兆し (Neuansätze)」というタイトルでグループ分けされたうちの第49章「庭の鉄格子の特別使命」を参照。Vgl. GA5, 150-160.

33 ②「中間の続き」のうち、「ゲラ刷りの章の続き」というタイトルでグループ分けされたうちの第63章「怪物を愛する試み」を参照。Vgl. GA4, 317-329.

2. 「前段階」の編集について

「続き」に関するこれまでの考察で確認したように、ファンタ版『特性のない男』の遺稿部分の編集は、デジタル版全集における学術性を背景にしつつも、編集の原則通りにいかない場合はあくまで物語としての読みやすさを優先させている。とはいえ、そもそも「生の圧倒的多様性を、一次元的な […] 単純な順序に写すこと」(GW2, 546)で安心させる「物語の糸」(ebd.)を批判・解体し、可能性感覚やエッセイスムスといったムージルの文学的方法にもとづいてテキストが執筆されたはずのムージルの『特性のない男』に対し、草稿を順序だてて配列し、読みやすく整えようとするファンタの編集は果たして妥当なものなのだろうか。このことを考察するために本章では『特性のない男』の「前段階」の草稿に関するファンタ版の編集方法を分析する。

『特性のない男』の前段階とされる草稿は、その最初期を1899年頃、すなわちムージルがエンジニアをめざしていたブリュン（ブルノ）工科大学時代にノートに書かれたとされる「生体解剖氏の夜の書」までさかのぼる場合³⁴もあるが、クラゲンフルト版全集では①1904年から1918年までの「小説の予備作業 (Vorarbeit zum Roman)」と総称される草稿群、②1918年から1921年に書かれた「スパイ (Der Spion)」構想、③1921年から22年にかけて執筆された「救済者 (Der Erlöser)」構想、④1923年から1926年にかけて執筆された「双子の妹 (Die Zwillingsschwester)」構想、そして⑤1928年、すなわち『特性のない男』第一巻の刊行以前に書かれた第二巻の構想がまとめられた「第二巻の章群 (Die Kapitelgruppen des Zweiten Buchs)」の4つのカテゴリーに分けてレーゼテキストに収められている。これに対してファンタ版全集では、①「小説の予備作業」を除いた②～⑤が「前段階」として第6巻に収められている。ファンタ版全集の重要な成果のひとつとして挙げられるのは、フリゼー(1978)版では迷宮のように入り組んだ遺稿群の中から断片的にしかうかがい知ることのできなかった前段階の構想を、「スパイ：1919-1920」、「救済者：1921-1922」、「双子の妹：1924-1925」と、クラゲンフルト版とは若干時代区分が異なるもののそれぞれの年代の構想ごとに分け、章番号を振り、まとまった形で読むことができるように編集をほどこしたことで、構想に関するムージルの「重心の置きどころ」³⁵の移り変わりがより明確に把握できるようになったことである。とはいえ、「最終版」には決してなりえず、「公開の度合い」で権威づけることもできない「前段階」の草稿の編集は、あくまで編集者であるファンタ個人の判断にゆだねられるところが多く、その編集方法には看過できない矛盾や、読みやすく編集されたからこそ明らかになった新たな問題も含まれている。「前段階」の草稿は非常に多岐にわたっており、本稿ですべてを網羅的に扱うことはできないが、ここではファンタ版全集に収められなかった①「小説の予備作業」と、編集をほどこされてファンタ版全集に収録された②「スパイ」構想を対象を絞って論じる。

34 Helmut Arntzen: *Musil Kommentar zum Roman »Der Mann ohne Eigenschaften«*. München (Winkler) 1982, S. 30.

35 オリヴァー・プフォルマン『ローベルト・ムージル——可能性感覚の軌跡——（組版仕様変更版）』、早坂七緒・高橋完治・渡辺幸子・満留伸一郎訳、叡智の海出版、2024年、121頁。Vgl. Oliver Pfohlmann: *Robert Musil*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2012, S. 103.

2-1 「ノート」の扱いをめぐる

1904年、すなわちムーヅルがベルリン大学で哲学と心理学を学びはじめた頃にノートに書き記された「小説の予備作業」(Hef4/89)という自伝的要素の強いテキストは、クラゲンフルト版においては「のちの『特性のない男』へ至る最初の直接的な執筆の試み」³⁶と位置づけられている。この草稿ではその後描かれることのない主人公の兄が登場したり、のちに短編小説「トンカ」で描かれることになる恋人ヘルマ・ディーツについての描写が含まれていたりするなど、さまざまな要素が混在しているが、中心となるのは青年時代のムーヅル、友人であるグスタフ・ドーナト、彼の妻となるアリースの三人の関係であり、それぞれローベルト、グストル(ヴァルター)、クラリセ(ベルタ)へと虚構されつつ描かれている。とりわけローベルトとクラリセの性的体験の共有や、ローベルトとグストルの幼友達ゆえの緊張にみちた関係の描写は、あきらかにのちの『特性のない男』に引き継がれている。また、上記の同名テキストを含む「小説の予備作業」と総称された1904年から1918年までの草稿群では、「小説のはじまり」、「三人の登場人物の物語」、「不信の悲劇」、「向かいのない家」、「カラス〔論者注：妻マルタのこと〕」のようにテーマごとに草稿が分類されて収録されており、ムーヅルがヘルマ・ディーツとの悲劇や妻マルタの体験といった自伝的要素をさまざまに組み合わせながら小説の構想を練っている様子が見て取れる。ヴァルター・ラーテナウ〔アルンハイムのモデル〕(H7/37, Hef2(A200))や快樂殺人者〔モースブルッカーのモデル〕(Hef16/1-2)など、その後の『特性のない男』の主要登場人物のモデルとなる人物の造形もまた同時期に書き留められており、クラゲンフルト版では『特性のない男』へと至る小説の構想が第一次世界大戦以前から徐々に形を成していく様子が見て取れる。

にもかかわらず、なぜファンタは「小説の予備作業」を普及版全集に含めなかったのだろうか。その理由についてファンタは、『特性のない男』に関するムーヅルの執筆プロセスに決定的な方向付けを行ったのは、自伝的要素よりもむしろ第一次世界大戦での体験であったとみなしている³⁷という以上には詳しい説明をしていない。しかし、ムーヅル全集を構成するうえで軽視できない編集上の問題としてここで取り上げておきたいのが、クラゲンフルト版で「小説の予備作業」としてまとめられた自伝的要素の強い草稿群は、「紙挟み(Mappe)」に収められた無数の独立したメモとともに、従来フリゼーが1976年に『日記』として出版していた複数の「ノート(Hef4)」、すなわちクラゲンフルト版においてはレーゼテキストの第16巻「初期のノート1898-1926」としてまとめられた複数のノート(Hef3, 5, 6, 11, II)にまたがって書かれているということである。ムーヅルのノートは、いわゆる日記のようにその日その日の出来事や、私的な心情を書き記す場であるだけにとどまらず、新聞や雑誌に掲載された数々のエッセイのもととなる理論的考察の場であり、また生成しつつあった新たな小説の構想や具体的な場面をス

³⁶ KA, Kommentare & Apparate. Werkkommentare Band 4: *Der Mann ohne Eigenschaften*. Die Vorstufen aus dem Nachlass Ediertes. *Vorarbeit zum Roman 1904-1918*. TEXTGENESE.

³⁷ Walter Fanta: Nachwort des Herausgebers. In: Robert Musil: *Gesamtausgabe*. Band 6 (*Der Mann ohne Eigenschaften*). Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2015, S. 688.

ケッチする場でもあった。「小説の予備作業」に関連するテキストの収められたノートもまた日記的要素と創作ノートの要素とが分かちがたく混在している。そのためどこまでがムージル個人の日記的な記述で、どこからが将来的に『特性のない男』へと至る草稿であるかを厳密に区別するのは、実際のところ不可能である。それでもクラゲンフルト版のレーゼテキストでは、編集協力者であるレギーナ・シャウニヒがこれらのノートから小説の構想が書かれたテキストであるとみなした部分だけを抽出し、紙挟みに収められた構想メモとともに分類・収録することで「小説の予備作業」としてまとめている。そのうえでデジタル版である利点を生かし、それぞれの草稿にハイパーリンクをほどこすことで『特性のない男』の「前段階」のテキストとしても、「初期のノート：1898-1926」としても読むことが可能になっている。同様のことを紙媒体の全集であるファンタ版において行うとすれば、同じ情報を複数の巻に重複して掲載するか、ノートをばらばらに解体しない限り不可能であろう。次節でも例示するように、おそらくムージルのノートをめぐるこうした事情が、ファンタ版全集の構成から日記が外された理由のひとつであると考えられる。

2-2 クラゲンフルト版における「スパイ」

「小説の予備作業」で確認できたようなムージルのノートをめぐる編集上の問題は、『特性のない男』の「前段階」においてはいずれの時代の構想においても見て取ることができ、結果的にファンタ版の編集にも影響を及ぼしている。本稿ではムージルが第一次世界大戦終結直後の1918年から1921年頃にかけて取り組んでいた「スパイ (Der Spion)」の草稿群に焦点を当てて論じるが、ファンタ版のもととなったクラゲンフルト版のレーゼテキスト自体にすでに編集方針の不統一が見られ、それが「読めない」要因の一つとなっているため、まずはクラゲンフルト版の編集上の問題について触れておきたい。

シャウニヒが中心となって編集されたクラゲンフルト版における「スパイ」構想のレーゼテキストは、ファンタ版のように章番号が振られて順番に読めるようになっていくわけではない。「小説の予備作業」における編集方法と同様に、まずシャウニヒが紙挟みに収められたメモと一部のノートから構想に関する箇所だけを抽出し、①「テーマ、登場人物、モチーフ：1918-1920」、②「スケッチとシナリオ：1919/20」、③「各章の草稿：1920」とテーマごとに分類して掲載している。たとえば、①「テーマ、登場人物、モチーフ」のレーゼテキストの冒頭を確認すると、「人物描写」と項目立てされ、その中に a)「ドッベルゲンガー」(Mappe IV/3/404)、b)「若者」(Hefte 10/76)、c)「主要イデオを補完する登場人物」(Hefte II/74)というように、テーマに沿ったメモ書きが箇条書きのように続いている。クラゲンフルト版の場合、それぞれのテキストごとにハイパーリンクがついており、クリックすれば「転写」に付せられた情報からどの時代にどの紙挟みやノートに収められたテキストなのかがわかるようになっている。しかし非常に困惑させられるのは、「スパイ」の草稿群には、上記の編集方針に加えて、さらに表紙に手書きで「スパイ (Spion)」と記された「雑記帳 (Schmierheft)」と呼ばれるノートをそのまま掲載した④「スパイ：ノート22」、それに続いて「スパイ」に関する書き込みが一部見られる⑤「20作品I：ノート8」、⑥「20作品II：ノート9」、⑦「20作品III：ノ

ート21]と計3冊のノートが、特に抽出作業が行われることもなく「初期のノート：1898-1926」のレーゼテキストにハイパーリンクで接続された形で置かれているということである。⑤～⑦のノートはいずれもかつてフリゼーが『日記』として刊行していたものであり、「20作品」とタイトルがあることからわかるように「スパイ」に関連するメモのほかにも「司祭小説(Priesterroman)」、「カタコンベ(Katakombe)」、「文書館司書(Der Archivar)」、「南極の国(Das Land über dem Südpol)」といった「スパイ」と同時期に書かれた別の小説の構想についてのメモや、「スパイ」が構想されたとされる時代とは異なる時代の構想や省察、読書記録などが書きこまれている。たとえば⑦「20作品 III：ノート21」では、「スパイ。アキレスはボグロムに参加するためにロシアへ行く？ […]のちに彼はあらゆる犯罪を経験し、犯罪の陳腐化を目の当たりにして、ほとんど聖人のようになる」(Heft 21/5)と、小説のプロットが要約されたような記述が一部みられるものの、別の箇所では「アンダース。妹との出会いは最初の物語めいた出来事である。それまでは人間の描写。物語のふりをしないこと」(Heft 21/63)という記述のように、主人公の名前が「アキレス」ではなく「アンダース」と変更されており、「スパイ」ではなく次の段階の構想である「救済者」のレーゼテキストに採用されている文章までもが「スパイ」構想に紐づけされる形で含まれていることがわかる。さらには「アメリカの公式の統計によれば、アメリカでは1924年に自動車事故によって19万人が死亡し、45万人が負傷した」(Heft 21/133)という文章のように、明らかに執筆された時代が「スパイ」の構想がなされた1918～21年よりも後の時代の——とはいえ実際に『特性のない男』に採用された——素材もノートには含まれている。これらのノートがなぜ①～③で行われていた編集方針を踏襲することなく、編集方針が不統一なままにされているのか疑問が残るが、クラゲンフルト版の注釈には「「スパイ」のテキストの生成過程を示す完全な資料としてではなく、このような方法で編集するという決定は、『日記』としてのノートの独立した構成を想定していたKAの編集者の事前の決定にもとづいていた」³⁸とあることから、やはりムージルのノートをめぐる編集上の困難さが反映されたものと考えられる。いずれにせよ読者は不統一な形で全集に収められたレーゼテキストを読まざるを得ず、こうした点もクラゲンフルト版が「読めない」とみなされる一因になっている。

2-3 ファンタ版全集における「スパイ」

ファンタが普及版において編集した「スパイ」は、すでに述べたように紙挟みやノートに収められた草稿群から特定の箇所を抜粋し、「最終版の原則」にもとづいて草稿に手書きで修正が加えられた箇所を書籍版向けのテキストに反映させながら、第1章～第27章までの章番号を振り、さらにそれぞれの章にタイトルを加えることで、フリゼー(1978)版の遺稿部分やクラゲンフルト版のレーゼテキストと比較しても格段に読みやすいものとなっている。編集されたテキストを実際に読むと、「スパイ」では『特性の

³⁸ KA, Werkkommentare Band 4: *Der Mann ohne Eigenschaften*. Die Vorstufen aus dem Nachlass Ediertes. *Der Spion*. TEXTKONSTITUTION.

ない男』に比べて快楽殺人によって精神病院に収監されたモースブルッガーの「境界問題 (Grenzfall)」(GA6, 13)、すなわち殺人を犯した際の責任能力の問題 (第1章、第13章)、そしてモースブルッガーと主人公との関係がよりクローズアップされていたことがよくわかる。冒頭では裁判の結果モースブルッガーに死刑が下され、処刑前日の刑務所に主人公が車で駆けつける場面 (第2章、第3章)、さらに殺人を犯したモースブルッガーの「告解」(GA6, 18)の場面 (第6章) が置かれている。主人公アキレスは自らを「病的な人間」(GA6, 17)と信じる「良心のない男」(GA6, 18)であり (第7章)、「場末の旅館」と題された比較的推敲の進んだ章 (第12章) では人妻と思しき女性の舌を噛み切るというきわめて陰惨な行為を行っている。このように当時のムージルは、モースブルッガーとアキレスとをドッベルゲンガーのように二重写しにするような構想を練っていたことがわかるが、そうした主人公の残酷さや非常識さは「戦争がもたらした」(GA6, 13) 結果であると記述されていることから、やはりファンタ版では第一次世界大戦の体験が小説の執筆プロセスに大きく影響を及ぼしているのがわかるような編集となっている。そのほか、父の葬儀のために故郷を訪れた主人公と白黒のパジャマを着たアガーテ (「スパイ」の草稿段階では姉) との再会の場面 (第8章)、のちのレオーナとポーナデアにあたる恋人たちが描かれる章 (第14章)、「小説の予備作業」に引き続き登場する主人公の幼友達ヴァルターとその妻クラリセ (第15章)、ディオティーマと魂をめぐる問題 (第19章、第20章、第24章)、のちのゲルダ・フィッセルにあたるユダヤ人銀行家の娘と反ユダヤ主義 (第21章) など、のちの『特性のない男』でも登場する人物やテーマのほか、クラリセやアガーテとのイタリアへの旅 (第9章、第10章) など、「スパイ」以降の草稿でも繰り返し構想され続けながらも先送りされ、結局『特性のない男』では描かれることなく終わったテーマについても、すでにこの段階で着手していたことが読み取れる。

とはいえ、「スパイ」の27章を構成するテキストの編集方法を確認すると、いくつかの問題点が見て取れる。ひとつは、別々に存在する複数の紙挟みやノートからテーマごとに草稿テキストを抽出・分類してまとめられていたクラゲンフルト版のレーゼテキストと比較すると、ファンタがいかなる原則にもとづいてテキストを取捨選択し、章番号をつけて並べているのかが明確でないという点である。例として冒頭の第1章から第7章までの草稿を確認すると、この7つの章は主に2冊の紙挟み (Mappe I, Mappe VII) と3冊のノート (HeftII, Heft 16, Heft22) にそれぞれ記述されていた登場人物や場面に関する断片的なメモから構成されていることがわかる。ファンタ版全集第6巻の後書きによると、ファンタは「スパイ」の草稿群に見出される筋書きやスケッチから物語の推移を拾い上げることはできたが、妥当性のある構成や統一的な構想の形式は見出せなかったため、1919年に書かれた草稿を第1章～第10章に置き、1920年に書かれた草稿を第11章～第27章に置くことで満足するほかなかったと記している。³⁹その意味ではシャウニヒがクラゲンフルト版をもとに新たなコンセプトで「スパイ」構想の編集を行った『アキレス・ロマーン』(2015)⁴⁰と同様、ファンタは「スパイ」に関連するテキストをあく

³⁹ Fanta: Nachwort, GA6, 695.

⁴⁰ Regina Schaunig: *Robert Musils „Achillesroman“*. Klagenfurt (Kitab) 2015. このなかでシャウニヒは、クラゲンフルト版では抽出作業がほとこされることなくリンクが張られていたノート 8, 9, 20, 21 を含む「ス

までムーゼルが執筆した時系列順に並べて編集しようとする意図がうかがえる。テキストの成立年代に厳密であろうとする姿勢は、「前段階」から「続き」に至るまでファンタの遺稿編集に一貫して見て取れる特徴である。しかしシャウニヒの『アキレス・ロマン』では草稿が執筆された時系列順に網羅的に並べられているのに対し、ファンタは普及版を構成するために複数の紙片に書かれた断片的なメモから物語の推移を拾い上げるのに必要な草稿を中心に抜粋し、物語として読みやすくするためにときには執筆された時系列とは無関係に草稿を並べている。たとえば7つの章のうち、第2章「処刑前日」から第4章「仮装舞踏会」までを確認すると、同一の紙挟み(Mappe I)に連続してナンバリングされている3枚のメモ(M I/6/65, 66, 67)を順番とおりに章立てして掲載しており、ファンタがそこにひとつのまとまりのある物語の流れを見出したものと推測できる。その一方で、第7章「良心のない男」はファンタ版全集で3ページ足らずのテキストであるが、2種類の紙挟みから5枚の断片的なメモ(M I/6/71, M VII/10/16, 18, 39, 40)を取り出し、順番を並び替えながら(M VII/10/40⇒MVII/10/16⇒M I/6/71⇒MVII/10/39⇒M VII/10/18)テキストを構成していることがわかる。並び替えの順番にムーゼルの意向が働いているとは考えられず、ファンタ独自の判断でテキストを操作しているのが見て取れる。

さらに問題点を指摘するならば、「アレクサンダー・ウンロート」とタイトルの付けられた第1章は1911年初頭から1927年初頭まで用いられていたノート16の最初のページに書かれているテキストであり、クラーゲンフルト版ではシャウニヒの編集によって「小説の予備作業」の「アナキスト(Der Anarchist)」とタイトルのつけられた草稿群に収められている。精神病院に収容されたモースブルッガーを主人公が訪問する場面を描いているこの草稿は、「スパイ」の物語を前後に因果関係をもたせつつ展開させるためには重要な草稿テキストかもしれないが、主人公の名前はアキレスではなく、アレクサンダー・ウンロートであり、クラーゲンフルト版の転写に付せられた注釈によると1911年初頭から1914年7月の間に書かれた草稿であることがわかっている。⁴¹ノート16は、「スパイ」が構想されていた1919年初頭から1920年12月までの間に手書きで表紙に「スパイ(Der Spion)」と書き込みがなされている。この書き込みによって、たしかに「アレクサンダー・ウンロート」の草稿を含め、ムーゼルが以前用いていたノート全体が新たに「スパイ」構想のために再利用されたと解釈できるかもしれない⁴²が、「アレクサンダー・ウンロート」のテキストをファンタ版全集の「スパイ」第1章として収録することは、第一次世界大戦以前の「小説の予備作業」時代の草稿を掲載しないというファンタ版の編集方針や、第1章～第10章には1919年に書かれた草稿を置くとしたファンタの後書きの記述とは明らかに矛盾している。異なる時代の草稿テキストをパッチワークのごとくつなぎ合わせて物語として読めるようにするというファンタの編集方法は、同様の方法によって批判された1952年のフリゼー版『特性のない男』の編集方法を彷彿と

パイ」関連の草稿テキストを網羅的に抽出し、さらにテーマ別ではなく年代順にテキストを編集している。

⁴¹ KA, Nachlass-Apparate. SEITENDOKUMENTATION. Hefte 16: *Der Spion*. Heft 16/1 und 2.

⁴² Vgl. Schaunig: *Robert Musils „Achillesroman“*, S. 107 sowie S. 140 (Anm. 418).

させるものであり、「続き」の編集に際して遵守しようとした厳密さを自ら手放していると思える。見なさをえなない。

とはいえ、ファンタ版はフリゼー(1952)版とは異なり、前段階の主人公の名前を編集者の意向で勝手に改変して『特性のない男』の続き部分に取り込んでいるわけではない。また「前段階」のテキストの帰属と編集方針に矛盾が見出されるとはいえ、決定稿である『特性のない男』との区別は厳密になされている。また、もともとのムージルのテキストがどのように編集をほどこされて全集に収められているかは、クラゲンフルト版全集や将来的には『ムージル・オンライン』を用いることによって確認可能であるという前提で編集されている。その意味ではデジタル版の併用によって学術性が担保されているからこそ、普及版で思い切った読みやすさを追究できているともいえる。

2-4 「読みやすさ」の外側で紡ぎ出される「スパイ」

最後に、ファンタ版全集がテキストの読みやすさを重視して編集されたからこそ明らかになった問題点について触れておきたい。それはムージル研究においては「スパイ」の概要として半ば定型文⁴³のようにになっている物語内容、すなわちスパイである主人公アキレスが「アガーテとの近親相姦的な関係におちいり、力を合わせて性犯罪者モースブルガーの釈放に尽力し、ともに君主国の極東地域であるガリツィアに赴き、そこで敵軍に売った軍事情報入手するためにアガーテに将校たちの相手をさせる」⁴⁴といった「通俗小説の乱雑な寄せ集め」⁴⁵のようなストーリーのことである。実はこの物語内容は、ファンタ版全集のテキストには一切登場しないのである。この点に関してクラゲンフルト版の注釈を確認すると、「いまやウルリヒ [論者注：ムージル?] の単なる思考計画へと押しやられてしまったガリツィア関連の筋は、もともとは次のようなものだった。すなわちウルリヒとアガーテの道徳的破綻を、性的放埒（キーワード：大饗宴、アガーテ、青年将校）とスパイ活動によって示すこと [参考：I/6/69; I/6/76; VII/8/2; I/6/102]」⁴⁶と大まかなあらすじが示されたうえで、関連する草稿番号が複数列記されている。しかし、実際に草稿を確認すると、上記で記したような具体的な物語内容は、前節(2-2)で挙げたノート21の短い要約以上にはどこにも見当たらず、「ガリツィアでの売春行為」(M I/6/69)、「ガリツィア。彼女は変わりゆく兄を再び愛さなくてすむように複数の関係をもち、へとへとにならなければならなかった」(M II/8/9)といった断片的な文章が置かれるか、せいぜいガリツィアの将校たちの性的放埒のシーンが「将校の思い出」(M I/6/76)というタイトルでスケッチされている程度で、物語として読むことができるようなまとまった草稿は見つからないのである。

ではなぜ、主人公のガリツィアでのスパイ活動といったあらすじだけが、ファンタが

43 たとえばオリヴァー・プフォルマンは「スパイ」のあらすじについて、「スパイとしての主人公は、オーストリアの国家機密をガリツィアでロシアの諜報員に渡す。しかも近親相姦関係にあった妹を、ためらうことなく将校たちの欲望にゆだねる。そして最後には、戦争におもむくことである種の自殺をはかる」と要約している。プフォルマン、119頁。Pfohlmann: *Robert Musil*, S. 102.

44 Fanta: *Nachwort*, GA6, 694.

45 Ebd.

46 KA, *Kommentare & Apparate*. Nachlass-Apparate: Siglen Schm. Aufb. TEXTGENETISCHE FUNKTION.

実際に草稿を編集して提示した内容よりも先行して知られているのだろうか。その理由として考えられるのが、ムージル自身による小説の出版予告である。ムージルは1926年4月30日に雑誌『文学世界』に掲載されたオスカル・マウルス・フォンターナとのインタビューにおいて、執筆中の「双子の妹」の概要の一部を次のように説明している。「最も精神的でない人間が最大のチャンスを得るような秩序への反発から、私の若い〈主人公〉はスパイになります。彼の戯れめいた興味がそれに関与します。彼の生の内容もまた関与することになります。なぜなら彼のスパイ活動の手段は双子の妹だからです。彼らはガリツィアを旅します。彼は彼女の生が失われ、そして彼自身の生も失われるのを目の当たりにします。」(GA11, 87) このインタビューでムージルが予告した小説「双子の妹」——「スパイ」ののちにムージルが構想した『特性のない男』の「前段階」のひとつ——は、「スパイ」がそうであったように結局出版にまで至ることはなかった。その代わりに4年後の1930年、スパイ活動とは大きくかけ離れた、非行動的で冷静な数学者ウルリヒを主人公とする『特性のない男』第一巻が、それまでとは「異なる美的原則にもとづいた」小説として出版される。それによって、反対にモースブルッカーを脱走させ、ガリツィアで主人公がスパイ行為をするといった非道徳的な活動を描く過程で当時の時代状況を提示するといった従来のイデーが、その他の無数の断片とともに、「異なる美的原則にもとづいた」イデーへと移行していった。しかしこの構想の影響は、迷宮のごとく入り組んだ草稿群が時代とともに整理され、物語として読めるテキストとしては存在しないことが明らかになってからも残り続けた。というのも、フォンターナとのインタビューで言及したムージル自身の半ば虚言めいた、しかしファンタの言葉を借りれば「公開の度合い」の高い発言によって、テキスト上では実現しなかった「ガリツィアでアガートとスパイ活動を行う主人公」というイデーが、いわば「権威づけ」られたからである。そしてその発言内容は、紙挟みに収められた紙片やノートにちりばめられた断片的なテキストを巻き込みつつ、結果的に「スパイ」をめぐる読みやすく編集されたファンタ版全集のテキストとは異なる、別の可能性をはらんだイメージを紡ぎ出しているのである。

おわりに

ファンタ版全集において読みやすい形で示された「スパイ」と、テキストとして形にならずともムージルのイデーとともに複数の断片から紡ぎ出されたもうひとつの「スパイ」が並び置かれるとき、そこには——ムージルが死の直前まで推敲を繰り返した「夏の日の息吹」の章が「思いつき」ともとられかねない「ウルリヒの後書き、結語」と並び置かれるときのように——小説の草稿から、順序立てて構成された物語(Erzählung)を読むだけでなく、無数の草稿や断片の言葉と言葉が紡ぎ出したイメージ(Bild)を読むという、未完の小説である『特性のない男』を読むうえでの別の可能性が示されている。このとき、ファンタが普及版全集で行った編集とは一体どのようなものなのか、改めて問い直す必要があろう。

すでに述べたように、「最終版の原則」にもとづいて草稿を整え、原則が通用しない

場合は物語としての読みやすさを優先して草稿テキストを取捨選択することで、あたかも「作者の最終的な意図」がそこにあるかのように演出するファンタ版全集の編集方法には、『特性のない男』の作品構成原理との根本的な齟齬が見て取れる。『特性のない男』では主人公ウルリヒの思考を通じて、時間的な経過の順序に従って出来事が物語られることでいかに「読者が楽しみをおぼえる」(GW2, 547)かについて考察がなされている。しかし同時に「あらゆるものはすでに非物語的になっており、もはや一本の糸に従わず、無限に織りなされた平面に広がっている」(ebd.)という認識が『特性のない男』を、そして可能性感覚にもとづいたムージルの執筆方法を貫いており、それが「続き」部分の草稿の枝分かれや「前段階」の構想のカオス的な断片性にも反映されている。そのことをふまえると、ファンタの普及版全集は、『特性のない男』が結果として未完に終わらざるをえなかったその背景となる要素や、断片的なテキストが取り残されたことがさらに小説を読む可能性を広げているという点まですくいあげて読むには、必ずしも十分な編集ではない。

ただし、同時に忘れてはならないのは、ファンタが普及版全集で行っている作業は、これまでに挙げたように読みやすさを優先することで生じたさまざまな矛盾や問題点が指摘できるにせよ、あくまで原則としてはムージルの草稿テキストを愚直なまでに年代順に並べて整理するという、学術的な裏付けのある作業であり、デジタル版との併用により、常に普及版の不足を補うことができるようになっている。ここに見て取ることができるのは、ファンタ自身が一方で追究しようとしていた「作者の最終的な意図」を演出しようとする編集作業とはむしろ一線を画す、遺稿編集者としての一貫した職人作業である。こうした年代の特定に関する厳密さに裏打ちされた編集により、フリゼー(1978)版やクラーゲンフルト版の編集がきっかけで生じた『特性のない男』が「読めない」という問題は、かなりの程度解消されているといえよう。また、「続き」部分をめぐる考察で指摘したムージル最晩年の「夏の日息吹」と「ウルリヒの後書き、結語」の扱いをめぐる問題にせよ、「前段階」のテキストをめぐる考察で指摘した、読みやすく編集されたテキストの外側に紡ぎ出される可能性としての「スパイ」のイメージの存在にせよ、いずれもムージルのカオス的な草稿テキストが時系列順に整理されたうえでファンタが編集をほどこしたからこそ新たに明らかになった問題点である。これまで「誰も最後まで読み通すことのできない」小説とされてきた『特性のない男』を、学術性が担保された読みやすい編集によって遺稿部分を含めて読み通すことを可能にし、それまでのフリゼー(1978)版やクラーゲンフルト版では見極めることのできなかつた新たな論点を提供すること、それこそがファンタ版全集がもたらした最大の成果ではないだろうか。その意味でファンタ版全集は、さまざまな問題をはらみつつも、単に読みやすさを提供するだけでなく、さらなる学術的な研究を行うための素材を提供しているのである。

参考文献

- Helmut Arntzen: *Musil Kommentar zum Roman »Der Mann ohne Eigenschaften«*. München (Winkler) 1982.
- Wilhelm Bausinger: *Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman »Der Mann ohne Eigenschaften“*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1964.
- Karl Corino: *Robert Musil. Eine Biographie*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2003.
- Walter Fanta: *Die Entstehungsgeschichte des »Mann ohne Eigenschaften« von Robert Musil*. Wien u. a. (Böhlau) 2000.
- Walter Fanta: Robert Musil – Klagenfurter Ausgabe. Eine historisch-kritische Edition auf DVD. In: *editio* 24. 2010, S. 117-148.
- Walter Fanta: Musil online total. In: Jens Klingner/Merve Lühr (Hrsg.): *Forschungsdesign 4.0. Datengenerierung und Wissenstransfer in interdisziplinärer Perspektive*. Dresden (Institut für Sächsische Geschichte und Volkskunde) 2019. S. 149-179.
- Adolf Frisé: Anmerkungen zum MoE-Nachlaßteil. In: Robert Musil: *Gesammelte Werke*. Band 1 (*Der nn ohne Eigenschaften*). Herausgegeben von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978, S. 2047-2051.
- Richard Kämmerlings: Die Enden der Parabel. Wie geht „Der Mann ohne Eigenschaften“ aus? Die neue Musil-Werkausgabe ermöglicht überraschende Entdeckungen zu einem Jahrhundert Roman. In: *Die Welt*. 18. Juli 2020, S. 28.
- 桂元嗣 「格子の向こうの群衆——時局に対するムージルの取り組みと『特性のない男』の「庭の章」」、『オーストリア文学』第24号、日本オーストリア文学会、2008年、10-18頁。
- 桂元嗣 「「構成的イロニー」再考——新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって」、『武蔵大学人文学会雑誌』第52巻3・4号、2021年、1-18頁。
- Thomas Mann: Robert Musil „Der Mann ohne Eigenschaften“. Antwort auf die Rundfrage: „Die besten Bücher des Jahres“. Erstmals in *Das Tagebuch*, Berlin, 13. Jg., H. 49, 1932. In: Ders.: *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. Band XI (Reden und Aufsätze 3). Frankfurt am Main (S. Fischer) 1960, S. 782-785.
- Bernhard Metz: *Bücher, nicht Texte: Warum wir Musil in der Klagenfurter Ausgabe nicht lesen können*. In: Massimo Salgaro (Hrsg.): *Robert Musil in der Klagenfurter Ausgabe. Bedingungen und Möglichkeiten einer digitalen Edition*. (Musil-Studien Band 42) München (Wilhelm Fink) 2014, S. 197-218.
- Robert Musil: *Gesamtausgabe*. Band 1-12. Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2016-2021.
- Robert Musil: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte digitale Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Herausgegeben von Walter Fanta, Klaus Amann, Karl Corino. Klagenfurt (Robert Musil-Institut der Universität Klagenfurt) 2009.

Robert Musil: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Update 2019. Herausgegeben von Walter Fanta. (Klagenfurt Robert Musil-Institut / Kärntner Literaturarchiv der Alpen-Adria Universität) 2019.

Francesca Pennisi: *Auf der Suche nach Ordnung. Die Entstehungsgeschichte des Ordnungsgedankens bei Robert Musil von den ersten Romanentwürfen bis zum ersten Band von „Der Mann ohne Eigenschaften“*. St. Ingbert (Werner J. Röhrig Verlag) 1990.

Oliver Pfohlmann: *Robert Musil*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2012 [オリヴァー・プフォーホルマン『ローベルト・ムーゼル——可能性感覚の軌跡——（組版仕様変更版）』、早坂七緒・高橋完治・渡辺幸子・満留伸一郎訳、叡智の海出版、2024年]。

Regina Schaunig: „Das Unfertige und das Ungeratene“. Musils Vorstufen zum Mann ohne Eigenschaften in digitaler Edition. In: *editio* 23. 2009, S. 109-146.

Regina Schaunig: *Robert Musils „Achillesroman“*. Klagenfurt (Kitab) 2015.

Is It Possible to Combine Readability and Academic Quality?: Editing of “The Man Without Qualities” in the Popularized Edition of Robert Musil’s Complete Works

Mototsugu Katsura

The popularized edition of the complete works of Musil (Gesamtausgabe), edited by Walter Fanta, aims to combine readability and academic quality by combining the digital version of the complete works with the historical-critical revision (Klagenfurter Ausgabe/Musil online). This paper focuses on the ‘continuation’ and ‘pre-phase’ conception of Musil’s unfinished *The Man Without Qualities*, and considers the problems of the editing method of this complete collection and the possibility of reading the unfinished novel in an academic way while using an easy-to-read, popularized edited complete collection.

The draft of the ‘continuation’ of Musil’s *The Man Without Qualities* is multi-branched. Fanta edits the ‘continuation’ under two principles - the ‘principle of the final version’ and the ‘principle of authority by the author’ - in an attempt to produce ‘the end result of the creative process’. However, Musil’s method of writing essentially moves in the direction of counteracting these principles mentioned by Fanta. The last chapter written by Musil before his death is influenced by his notes on the concluding part, which Fanta does not relate. In the pursuit of readability, it is no longer possible to see the development of the ideas between drafts. However, the digital edition complements the popular version in this way.

The pre-phase texts are composed of fragmentary notes written in folders or notebooks. The earliest conceptions are autobiographical texts written in notebooks, but the notebooks are also used as diaries, making it difficult to distinguish between the two. The Fanta-edition excludes the ‘preliminary work on the novel’, which has a strong autobiographical element. *The Spy* in the popular edition of the complete collection is easy to read, because drafts are organized and chapters numbered. But its editing method does not follow the above-mentioned principles and shows the same arbitrariness as the Adolf Frisé edition (1956), which has been criticized. However, the academic quality of the book is ensured by using it in combination with a digital version. That is why the popularized edition pursues a drastic readability. The synopsis of *The Spy* is known to be about a brother and sister having incestuous relations and conducting espionage in Galizia. However, this was only what Musil had said in an interview prior to the publication of *The Man Without Qualities*, and the popularized edition reveals that Musil had written only keywords in his draft. Therefore, the popularized edition not only provides readability, but also serves as an entry point for further academic studies.